

雀の食堂

小熊 捍



食堂の佳

小熊 捍



講談社

雀の食堂



昭和四十二年三月十五日 第一刷

定価五八〇円

著者 小熊 捍

発行者 野間 省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽三三三
電話(九四三)一一一一(大代表)
振替東京三九三〇

印刷所 穴戸整版印刷株式会社

製本所 大製株式会社

はしがき

この「雀の食堂」は「虫の進軍」「桃栗三年」につづいての小熊さんの第三随筆集である。そのうち「桃栗三年」に対しては第五回日本エッセイストクラブ賞が与えられた。受賞の直後、わたしはクラブの会報におおよそ次のような一文を寄せたことがあった。

研究論文はたくさん書いたが、本は一冊も出したことがないというのが、ひとところ、小熊さんの自慢であった。なるほど、本を出さなかったことには間違いないが、そのかわり、小熊さんは早花を育て庭をつくり、音楽や絵画をたのしんだ。その上、北海道大学理学部長になってからは、大学に低温科学研究所、触媒研究所と二つも研究所をつくり、さらに国立遺伝学研究所の創設に力をつくされた。こう忙しくしては、本を書く暇などなかったのも無理はない。

しかし、戦争がおわると、周囲の事情が悪くなったことから、かえって余裕ができたものか、小熊さんは急に随筆をものしはじめた。

小熊さんの書いた随筆を初めてよんで、わたしたち悪童どもはその意外にうまいのにすっかり感心してしまった。「小熊さんも見上げたね」などと大先輩に対して失礼きわまる言辭を故中谷

宇吉郎君などとりかわしたものであった。こうしてかげでやっている批評は小熊さんの耳にはあまりはいらなかったらしい。失礼だといって叱られもしなかったかわり、小熊さんは自分の随筆の出来映えについて、いつまでたっても小心翼翼としておられたようである。

クラブ賞授与式のときの挨拶からもわかるとおり、小熊さんの弱気はいまだに抜け切っていないらしい。庭作り、音楽絵画への愛好は相かわらずであるにしても、いまは遺伝学研究所長の職から引退して自適の境涯においでなのだから、この際そんな弱気はきれいに清算してしまった方がいい。年齢を感じさせないあのみずみずしくも美しい随筆をこれからもたくさんものされることを望むのは、ひとり、わたしばかりではないだろうと思うのである。

あれから十年の歳月が流れた。わたしの願をきき届けられてか、小熊さんはその後も所々の雑誌にずっと随筆を書きつづけられた。その中の珠玉を選んで集めたのがこの「雀の食堂」である。「桃栗三年」にもまして、人々を楽しませ、人々に喜ばれることを期待するものである。

なお、この随筆集が出版されるについては、藤岡由夫氏のご尽力によること多大なものがあつた。また、その編集校正その他については講談社の関成子さんが並々ならぬ熱意をもって当たって下さった。小熊さんとともにわたしからも厚く感謝の意をここに表しておきたい。

一九六六年十月

吉田 洋 一

目次

はしがき……一

猫の気持ちはわからない

猫の気持ちはわからない……一二

猫にセンブリ……一五

猫踏んじやった……一九

猫と暮して十年目……二二

雀食堂再建記

雀食堂再建記……二七

雀食堂白書……三〇



雀点描……三三

出かせぎ雀と留守番雀……三七

珍客……四〇

訪れる小鳥たち……四三

ハシブトガラス行状記

蛇と武郎さん……四九

蛇は何故こわい……五七

動物回想……六〇

動物の気候順化……六六

象の毛……六九

ハトの卵……七一

ハシブトガラス行状記……七四

鳥の故郷



はげ山に泣く……七九

鳥の故郷……八二

白鷺……八八

郭公……九二

鳥の生態も変わってくる……九五

鳥類愛護の道は遠い……九八

心温まる話……一〇一

ヒヨと南天……一〇四

見直した庭のモズ……一〇七

柿とウグイス……一一〇

河原の哀歌

ハルゼミ……一一五

つくづくおいしい……一一七

案外むずかしい……一二一



クロアゲハ……一二四

チョウチョウ今昔……一二七

河原の哀歌……一三〇

日向ぼっこのチョウたち……一三三

秋はたのし……一三六

トンボの目玉……一三八

ムカシトンボ……一四一

赤トンボ……一四二

凍死したジョロウグモ……一四八

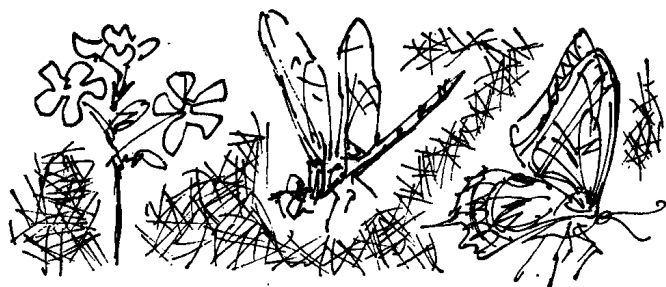
早くきた寒さ……一五一

雑草もまた美しい

春夏秋冬花絶えず……一五七

明治の頃……一五九

草花異変……一六二



白い苺……一六五

「白い苺」後日談……一六八

バラ作り十年生……一七一

雑談ヒガンバナ……一七四

椿に想う……一七七

梅によせて……一八〇

シダ礼讃……一八三

スミレの想い出……一八六

夏の乾燥と冬の開花……一八九

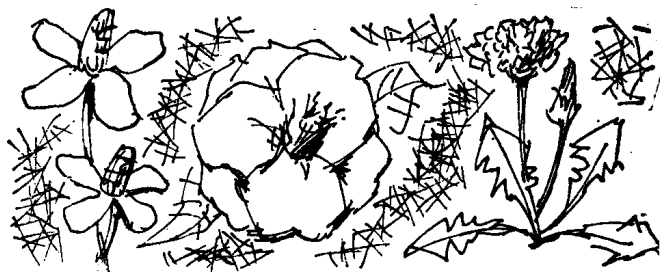
雑草談義……一九二

雑草もまた美しい……一九五

落ち葉の春

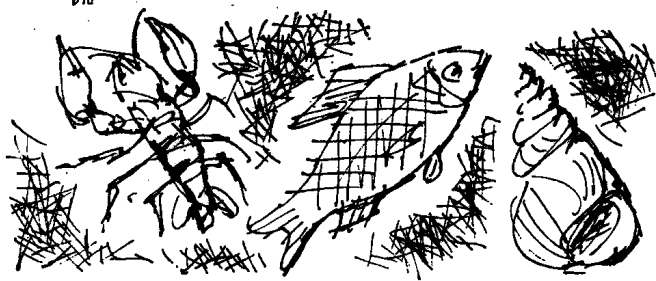
落ち葉の春……二〇一

サクラの葉……二〇四



桃栗三年……	二〇七
泥棒日本人……	二一一
貴い草いきれ……	二一四
失われゆく季節感……	二一六
風薫る……	二一九
生物の榮枯盛衰……	二二二
箱根山……	二二五
流れはたのし……	二二八
生け垣……	二三三
果樹の並木がほしい……	二三六

装幀及カット 中島靖侃



猫の気持ちはわからない



猫の気持ちはわからない

ふと思いだしたように私は猫を飼いだした。三年前のことであった。別に鼠退治を考えたのではなく全くの愛玩用に過ぎない。それは純白の雌猫で、目に陰のある決して別嬪とはいえない猫であるがチロという名をつけてとにかく大切に育ててきた。チロは年頃になって第一回のお産をしたがそれは日足らずで流産してしまった。やがて第二回のお産を迎えた。こんどは無事に産ませたいと万端注意を怠らなかつた。しかし、残念なことに三匹産んだには産んだのだが、三匹共に何分間かこの世の空気をすつたと思う間もなく死んでしまった。これからが問題である。

元来生まれたての子猫の目は閉じているものである。ところがこの子猫の目は開いている。そつと目蓋をあけて見ると、眼球が完成していないで、ただぐじゃぐじゃしている。だから育つたとしても盲目になることは疑いない。死んだのは私のためにも、また猫のためにもよいことであつた。子猫の死体は川に流してしまった。

これでお産の始末はついたものの、チロのお乳は張りきっている。姿を消した子猫を探し回る

心配もあるので、ちょうどその頃生まれた猫の子を貰ってきてチロに当てがってやった。その猫は純黒の雄で、チロとも死んだチロの子とも全く対照的な色をしているのを特に面白いと思つた。そして、しごく平凡にクロと名づけることにした。

チロは初めてクロを見たときにやや敵意を示したが、クロの方は一向におかまいなしで、チロの乳首をくわえている。そのうちにチロも全く自分が産んだ子のようにクロを扱いだした。白猫の腹に頭を埋めて黒猫が横たわっているのは誠に可愛いらしい。おかげでクロはただ一匹でチロの乳を専有して、すくすくと育っていった。

やがてクロには乳離れの時期が来た。クロは私共が与える食物を自力で食べたのである。するとつい先日まで全くわが子のように愛撫しておったクロに対して、チロは猛烈に敵意を現わし始めてきた。クロの方は無邪気だからチロにじゃれついて行く。するとチロは恐い顔してうなりだす。廊下の角で出会わすとうなり声ばかりでなく前肢をあげてクロの頭をばかりとやる。今からこんな風だと、将来この二匹が果たして一つの屋根の下で飼えるかどうか、疑わしくなってきた。一体これはどうしたことなのであらう。私はいろいろと考えて見た。そしてこれは乳離れした子を一匹の生存競争の相手として扱いだしたにちがいないと考えついた。だとするとこれは随分と厄介なことである。折角白と黒との対照的な二た色の猫を周辺において私自身の生活を賑やかにしようとした企てが、毎日喧嘩猫の仲裁ばかりしているようになっては、全くやりきれ

たものではない。なんとでもして、この二匹を仲よく暮させなければならぬ。だが、私にはその手段が全くわからないで、困った困ったといひ乍ら日を過ごしていたのである。

その中にチロのお腹が三度ふくれだしてきた。妊娠したのである。ところがそうになるとクロに対する敵意はますます高まるばかりで手のほどこしやうがない。やがて月満ちてチロは第三回目のお産をした。前回と同じく三匹産んだが、その内の二匹は純白でやっぱり盲目らしい。その上三匹とも暫時呼吸しておったが、間もなく死んだ。もちろんその子はすぐ畑へ持って行って葬ってしまった。すると突然奇蹟が起こった。チロは今までの敵意を見事に一蹴して、愛撫しながらクロに再び乳を与えだしたのである。またクロの方でも一旦打ち切った乳への愛着を完全にとり返して、再びチロの腹に頭を突っ込みだし、したがって別に与える餌を顧みないようになった。

こうなると乳は十分にあるし、チロは愛して呉れるし、クロはいい気になって大きくなっていった。クロは今日すでに生れてから六か月以上になる。今でも時々チロの乳頭を探しているが、さすがに乳の分泌はなくなつたらしい。それでも乳頭をくわえる所作は忘れない。今は義母のチロと殆ど同じ位に成長したクロが、チロの乳頭をくわえながら二匹で長々と添ひ寝している図は、全くほほ笑ましい限りである。チロとクロとの親子はほんとうに血のつながる親子のように楽しく暮らすようになった。しかしチロが今度妊娠したら、また元のように敵意を以てクロに向かうようになるかもしれない。とにかく、猫の気持ちはわからないものだから。

チロが何時も純白で盲目の子を産むことは何か遺伝的な宿命であるのかも知れない。また他方では、チロが驚くべき偏食家であるということが関係しているのではないかとも思われる。猫通の人の話によると、猫は甘やかせば始末が悪くなるそうで、チロの偏食も私等夫婦が余り些細な点まで気を回してチロの御意を伺い過ぎるからいけないのだともいわれている。とにかく、刺身なら喜んで食べるが、煮たり焼いたりした魚は一切食べない。アジとイワシは生なら食べるが二回続けると後ろを向いてしまう。

一番面白いのは、海苔を砕いて振りかけた飯が好きなこと、どうも江戸っ子の感覚があるように思われる。ところがこの海苔に文句がある。始めの間は東京の有名店の海苔を私共の食卓から分けて与えておったが、これでは家計の上で面白くないので妻が街へでて一帖六十円の花巻を買って帰り、これを猫専用にしたのである。価は六十円でも海苔は海苔で香りはある。しかしこの海苔を飯にふりかけてやったら、ちょっと香りを嗅ぐなり片足をぶるぶるとふって妻の顔を見上げ、悲しい声で泣くのだ。もっとよい海苔をくれと頼んでるらしい。そこで再び食卓用の海苔を与えると、喜んでたちまち食べ始める。こうして幾度か実験した結論として、チロは一帖八十円以上の海苔でないと絶対に食べないことがわかった。

これに関連して面白い事実がある。それは餌皿に飯を盛って（もちろん、これだけでは食べない）、さて海苔をとりだそうとして缶の蓋をすりあけると、まだ海苔をつかまないうちにその音